農水省のフード・アクション・ニッポン

「いわて短角牛」部門最高賞

食料自給率向上に貢献

【東京支社】農林水産省が手掛ける食料自給率向上運動「FOOD ACTION NIPPON（フード・アクション・ニッポン）」の事務局は15日、自給率向上に寄与する取り組みを表彰する賞を発表し、本県といわて牛普及推進協議会の「いわて純情プレミアム短角牛」が大賞に次ぐプロダクト部門最優秀賞を受賞した。県産短角牛は安全・安心の食肉として根強い人気があるが、生産者と出荷頭数は減少傾向にあり、受賞は業界にとって朗報。「こだわりの岩手ブランド」の確立にも貢献しそうだ。

授賞式は同日、東京・品川のイベントホールで行われ、同協議会会長の瀬川純県農林水産部長、新岩手農協宮古営農経済センターの清川博岩泉地区担当課長らが出席。

瀬川会長は「生産者、農協、行政の励みになる。安心・安全で高品質な牛肉づくりが、食料自給率向上につながるよう、頑張っていく」と謝辞を述べた。

フード・アクション・ニッポンの賞は本年度創設された。プロダクト部門と▽製造・流通・システム▽コミュニケーション・啓発▽研究開発・新技術―の4部門。プロダクト部門には370件、4部門で1204件の応募があり、各部門で最優秀1点、優秀10点を選んだ。

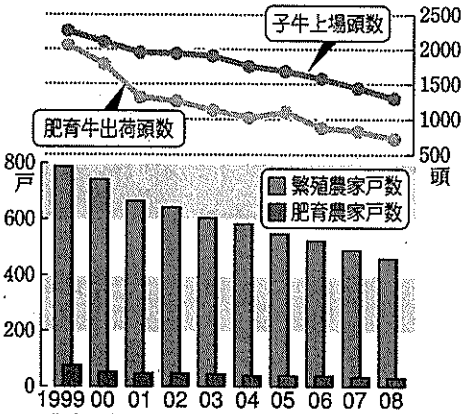
いわて純情プレミアム短角牛は、輸入トウモロコシなどの濃厚飼料を抑制し、地場産の飼料を与えて育てる。食の安全・安心と、輸入飼料を輸送する際の二酸化炭素（CO_2）削減につながる。自給率向上への貢献とともに飼料を生産する休耕田の活用につながることなどが評価された。

本県の短角牛の飼養頭数は繁殖牛が1986年の約1万4千頭、肥育牛は85年の約5200頭をピークに減少。2008年には繁殖牛が2663頭、肥育牛が1310頭にまで落ち込んだ。

牛肉の輸入自由化による価格低迷などで産地衰退が懸念されていたが、近年は安全・安心の食肉として引き合いが高まっており、産地維持に向けたブランド化や販路拡大が課題となっている。

フード・アクション・ニッポンの大賞は、養鶏飼料自給率アップに飼料用米を活用する常盤村養鶏農業協同組合（青森県藤崎町）が受賞した。

本県の短角牛の生産者と出荷頭数



※農家戸数は各年2月1日、子牛上場頭数は年、肥育牛出荷頭数は年度

いわて純情プレミアム短角牛 地場産の飼料用トウモロコシのサイレージ（乳酸発酵させた飼料）などの粗飼料の割合を重量割合で70％以上与え育てた短角牛。安全・安心のほか環境にも配慮した本県のブランド牛。いわて牛普及推進協議会は2005年度から試験育成を開始。08年度から岩泉町と久慈市山形町で肥育が始まり、09年に初めて18頭が出荷された。今年は50頭ほどの出荷を目標にしている。